

悠久の京を訪ねて

Vol.5



京は古より人々が集い、その気候・風土を織り交ぜ、日本の中心地として生活が営まれてきました。それは京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により縄文、弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのかを知ることは、これからの生活を考える上でも重要な事だと言えます。出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

京都府指定文化財：土辺古墳の家形埴輪

京都府乙訓郡大山崎町



いろいろな埴輪

「埴輪」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか。「踊る人」や「大魔神のような武人」、「飾りがたくさん付いた馬」などを連想することが多いと思います。

埴輪はもともと、古墳という有力者の棺のまわりなどを何重にも取り巻いてお墓を立派にみせるものなので、土管のような円筒形の埴輪(円筒埴輪)が、その大部分を占めます。

埴輪は、古くは3世紀に考え出されました。棺の周囲には、四角く囲まれた祭壇がしつらえられ、その中心部の一

番大切な場所(棺の真上)には、亡き王の魂が宿る建物(依代=よりしろ)が造られました。それが、やがて土の焼き物になったものが家形埴輪と考えられています。家形埴輪は一番大切な部分に置かれる埴輪だったので、

その形には、神社のお社（社）のような性格があるため、当時の住まいの姿ではなく、



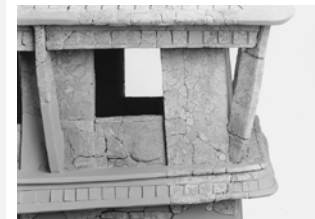
土辺古墳から出土した家形埴輪の復元品

祭殿や神殿を真似て造ったことが想像されます。

土辺古墳の家形埴輪

乙訓郡大山崎町土辺古墳から出土した家形埴輪は、その最も古い形をとどめており、当時の祭殿の特徴を私たちに教えてくれる貴重な資料です。

この埴輪は高床の建物(高殿)で、壁や屋根には線刻や立体的な装飾が施されています。この装飾は他の器物を象った埴輪(「盾」や「きぬがさ」など)にも共通しており、悪霊を退散させ、神聖な場所を守る意味合いがあったとみられています。さらに重たい屋根の軒先を支える「方杖（ほうじょう）」と呼ばれる補強材は、他に例がなく、当時の建築技術を知る貴重な資料といえるでしょう。この家形埴輪は、京都府指定文化財として、京都府立山城郷土資料館で保管・展示されています。



軒先を支える「方杖」と呼ばれる補強材